

## 巾零 Lie 群に付随する Gelfand 対

京大 理 菊地 克彦 (Katsuhiko KIKUCHI)

### § 0 序

$N$  を連結かつ単連結な巾零 Lie 群,  $K$  を  $N$  に自己同型として作用する compact 群とする. すると,  $K$  は群代数  $L^1(N)$  にも自己同型として作用する.  $L^1(N)$  の  $K$  不変元全体のなす部分代数を  $L_K^1(N)$  で表す. このとき, 対  $(K; N)$  が  $N$  に付随する Gelfand 対 (以下単に Gelfand 対) であるということ,  $L_K^1(N)$  が可換であることとする. Benson-Jenkins-Ratcliff によると,  $(K; N)$  が Gelfand 対ならば,  $N$  は高々 2-step である. ([BJR]). 今回は, 一般の 2-step 巾零 Lie 群について,  $(K; N)$  が Gelfand 対であることの判定を, Heisenberg 群の場合に帰着させる方法を論じる. これは本質的には Carcano の判定条件に依存するが, その際に使われる  $N$  の既約 unitary 表現の代わりに, その表現に自然に付随する Heisenberg 群を用いて判定するという方法である.

その応用例として、 $N$  の Lie 代数  $\mathfrak{N}$  の中心  $\mathfrak{Z}(\mathfrak{N})$  と導来 ideal  $[\mathfrak{N}, \mathfrak{N}]$  が異なる場合の様相を論じる。その際、compact 群  $K$  の  $\mathfrak{Z}(\mathfrak{N})$  への作用が Gelfand 対の判定に強く関わることを反例を用いて示す。

さらに、 $K$  が  $n$  次 torus  $T^n$  の場合の、 $(K; N)$  が Gelfand 対となる条件を決定する。これは、Leptin が  $[L]$  において行、た  $[\mathfrak{N}, \mathfrak{N}] = \mathfrak{Z}(\mathfrak{N})$  の場合の結果の拡張をなすものである。

なお、以下において、中零 Lie 群は常に連結かつ単連結を仮定する。

## § 1 準備

$\hat{N}$  を  $N$  の既約 unitary 表現の同値類のなす空間とし、 Fell 位相が入っているとする。  $\pi \in \hat{N}$  とするとき、  $h \in K$  について  $N$  の表現  $\pi_h$  を  $\pi_h(x) = \pi(h \cdot x)$  で定義する。すると、  $\pi_h$  も  $N$  の既約 unitary 表現になる。  $K$  における  $\pi$  の安定化部分群を  $K_\pi$  とする:  $K_\pi = \{h \in K \mid \pi_h \simeq \pi\}$ 。  $\pi$  の表現空間を  $\mathcal{H}_\pi$  とするとき、  $h \in K_\pi$  に対して、ある  $\mathcal{H}_\pi$  上の unitary 作用素  $W_\pi(h)$  が存在して、  $\pi_h(x) = W_\pi(h) \pi(x) W_\pi(h)^{-1}$  ( $x \in N$ )。  $W_\pi$  は  $K_\pi$  の  $\mathcal{H}_\pi$  上の射影表現になる。 compact 群の unitary 表現の理論と同様にして、  $W_\pi$  は  $K_\pi$  の既約射影表現の直和に分解される:

$$W_\pi = \sum c(T, W_\pi) T.$$

ここで,  $c(T, W_h)$  は  $W_h$  における  $T$  の重複度である.

定理 1.1. [C] 以下の3つの条件は同値である:

- (1)  $(K; N)$  は Gelfand 対.
- (2) 任意の  $\pi \in \hat{N}$  について  $c(T, W_h) \leq 1$ .
- (3) ある稠密な部分集合  $S \subset \hat{N}$  が存在し, 任意の  $\pi \in S$  について  $c(T, W_h) \leq 1$ .

$\hat{N}$  の部分集合  $S$  に対し,  $S \cdot K = \{\pi_h \mid \pi \in S, h \in K\}$  とおく.

系 1.2. 定理 1.1. の各条件は, 次の条件とも同値である:

- (4)  $S \cdot K$  が稠密になるような  $S \subset \hat{N}$  が存在し, 任意の  $\pi \in S$  について  $c(T, W_h) \leq 1$ .

Kirillov の理論によると, 余随伴軌道の空間  $\mathfrak{n}^*/N$  と  $\hat{N}$  には 1 対 1 対応がある ([Ki]). さらに,  $\mathfrak{n}^*/N$  に  $\mathfrak{n}^*$  からの商位相を入れると, この対応は同相になる ([Br]).  $l$  に対応する  $N$  の既約 unitary 表現を  $\pi_l$  と表す. いま,  $K$  の  $\mathfrak{n}^*$  への右作用を  $(l \cdot h)(X) = l(h \cdot X)$  ( $l \in \mathfrak{n}^*, h \in K, X \in \mathfrak{n}$ ) で与える. すると,  $(\pi_l)_h \simeq \pi_{l \cdot h}$ . さらに,  $((\text{Ad}^*(\alpha)l) \cdot h)(X) = (\text{Ad}^*(h^{-1} \cdot \alpha)(l \cdot h))(X)$  ( $\alpha \in N, l \in \mathfrak{n}^*, h \in K, X \in \mathfrak{n}$ ).

よって,  $(\text{Ad}^*(N)l) \cdot K = \text{Ad}^*(N)(l \cdot K)$  ( $l \in \mathfrak{n}^*$ ). このことにより, 系 1.2. における  $S$  として,  $\{ \pi_{\alpha}(\text{Ad}^*(N)l_{\alpha} \cdot K) \}$  が  $\mathfrak{n}^*$  において稠密になるような  $\{ l_{\alpha} \}_{\alpha \in A}$  について,  $\{ \pi_{\alpha} \}_{\alpha \in A}$  をとればよい.

## § 2 Heisenberg群への帰着

まず,  $(2n+1)$  次 Heisenberg 群  $H_n$  の場合について考える.  $\mathfrak{h}_n$  を  $H_n$  の Lie 代数,  $K$  を自己同型群  $\text{Aut}(\mathfrak{h}_n)$  の compact 部分群とする.  $\mathfrak{h}_n$  の中心  $\mathfrak{z}(\mathfrak{h}_n)$  は  $K$  不変であり,  $K$  は compact だから,  $\mathfrak{z}(\mathfrak{h}_n)$  または  $\mathfrak{z}(\mathfrak{h}_n)$  を像にもつ  $K$  の character  $\chi$  が存在し,

$$k \cdot \chi = \chi(k) \chi \quad (\chi \in \mathfrak{z}(\mathfrak{h}_n), k \in K).$$

いま,  $K$  が  $\mathfrak{z}(\mathfrak{h}_n)$  に自明に作用しているとしよう.  $\mathfrak{h}_n$  における  $\mathfrak{z}(\mathfrak{h}_n)$  の  $K$  不変な補空間を  $V$  とする. このとき,  $V$  に適当な複素構造  $I$  及び複素内積  $\omega$  をとることにより,  $K$  は  $\omega$  に関する unitary 群の部分群とみなせる.

$H_n$  の既約 unitary 表現で, 中心において自明でないものは  $\mathfrak{z}(\mathfrak{h}_n)$  の central character で決定される.  $\mathfrak{z}(\mathfrak{h}_n)$  の生成元を  $T$  とし, central character  $\chi_{\lambda}$  を  $\chi_{\lambda}(\exp tT) = e^{i\lambda t}$  ( $t \in \mathbb{R}$ ) とおくと, 対応する  $H_n$  の既約 unitary 表現を  $R_{\lambda}$  と表す.  $\{ R_{\lambda} \}_{\lambda \neq 0}$  は  $\hat{H}_n$  において稠密である. 定理 1.1 より,  $\{ R_{\lambda} \}_{\lambda \neq 0}$  のみ考察すればよい.  $R_{\lambda}$  を Fock model で実現する.

$\lambda > 0$  に対し,  $\mathcal{H}_\lambda$  ( $\mathcal{H}_{-\lambda}$ ) を  $V$  上全体で正則 (反正則) な関数  $f$  であつて,  $\int_V |f(w)|^2 e^{\frac{\lambda}{2}|w|^2} dw < +\infty$  となるもの全体のなす Hilbert 空間とする. ただし,  $dw$  は  $V$  を  $\mathbb{R}$  上 vector 空間とみたときの Lebesgue 測度. 表現  $R_\lambda$  は次の形で与えられる:

$$(2.1) \quad (R_\lambda(z, t) f)(w) = e^{\sqrt{\lambda} t - \frac{\lambda}{2} w \bar{z} - \frac{\lambda}{4} |z|^2} f(w+z),$$

$$(2.2) \quad (R_{-\lambda}(z, t) f)(w) = e^{-\sqrt{\lambda} t - \frac{\lambda}{2} w \bar{z} - \frac{\lambda}{4} |z|^2} f(w+z), \quad (\lambda > 0)$$

$\lambda > 0$  のとき,  $\mathcal{H}_\lambda$  は正則多項式環  $\mathbb{C}[V]$  を,  $\mathcal{H}_{-\lambda}$  は反正則多項式環  $\overline{\mathbb{C}[V]}$  をそれぞれ稠密に含む.

$h \in K$  は, central character を不変にすることにより,  $K$  における  $R_\lambda$  の安定化部分群は  $K$  自身になる.  $h \in K$  に対し,  $\mathcal{H}_\lambda$  上の unitary 作用素  $W_\lambda(h)$  を次で定義する:

$$(W_\lambda(h) f)(w) = f(h^{-1} \cdot w), \quad (f \in \mathcal{H}_\lambda, w \in V).$$

簡単な計算により,  $R_\lambda(h \cdot (z, t)) W_\lambda(h) = W_\lambda(h) R_\lambda(z, t)$  となることが分かる. 明らかに  $W_\lambda(h_1 h_2) = W_\lambda(h_1) W_\lambda(h_2)$ . さらに,  $\mathbb{C}[V]$  は  $W_\lambda$  について不変であり,  $W_\lambda$  の  $\mathbb{C}[V]$  上の作用は  $\lambda > 0$  のとり方に依らない.  $\lambda < 0$  のときも, 正則関数を反正則関数に読み換えれば同様の議論がなされる. よつて, ただ1つの実数  $\lambda_0 \neq 0$  について考察すればよい.

命題 2.1. [BJR]  $(K; H_n)$  が Gelfand 対であるのは, ある  $\lambda_0 \neq 0$  について  $W_{\lambda_0}$  が 高々 重複度 1 に既約分解されるときである.

話を一般の 2-step 中零 Lie 群  $N$  に戻そう.  $N$  の既約 unitary 表現の構造を考える.  $\mathfrak{l} \in \mathfrak{h}$  に対し,  $\mathfrak{n}$  上の交代形式を次で定義する:

$$B_{\mathfrak{l}}(X, Y) = \mathfrak{l}([X, Y]), \quad (X, Y \in \mathfrak{n}).$$

この  $B_{\mathfrak{l}}$  を用いて,  $\mathfrak{n}$  の部分空間  $\mathfrak{n}(\mathfrak{l}), \mathfrak{b}(\mathfrak{l})$  を次で定義する:

$$(2.3) \quad \begin{aligned} \mathfrak{n}(\mathfrak{l}) &= \{X \in \mathfrak{n} \mid B_{\mathfrak{l}}(X, Y) = 0 \quad \forall Y \in \mathfrak{n}\} \\ \mathfrak{b}(\mathfrak{l}) &= \mathfrak{n}(\mathfrak{l}) \cap \ker \mathfrak{l} \end{aligned}$$

命題 2.2.  $\mathfrak{l} \in \mathfrak{h}$  を 0 でない元とする. このとき,

- (1)  $\mathfrak{n}(\mathfrak{l})$  は  $\mathfrak{n}$  の ideal である.
- (2)  $\mathfrak{b}(\mathfrak{l})$  は  $\mathfrak{n}$  の ideal である.
- (3)  $\dim(\mathfrak{n}(\mathfrak{l})/\mathfrak{b}(\mathfrak{l})) = 1$ .
- (4)  $\mathfrak{l}|_{\mathfrak{n}, \mathfrak{n}} \neq 0 \Leftrightarrow \mathfrak{n}(\mathfrak{l}) \neq \mathfrak{n}$ . このとき  $\dim(\mathfrak{n}/\mathfrak{b}(\mathfrak{l})) > 1$ .

さらに,

$$\begin{aligned} \mathfrak{z}(\mathfrak{n}/\mathfrak{b}(\mathfrak{l})) &= \mathfrak{n}(\mathfrak{l})/\mathfrak{b}(\mathfrak{l}), \\ (\mathfrak{n}/\mathfrak{b}(\mathfrak{l})) / (\mathfrak{n}(\mathfrak{l})/\mathfrak{b}(\mathfrak{l})) &\cong \mathfrak{n}/\mathfrak{n}(\mathfrak{l}). \end{aligned}$$

$\mathfrak{n}/\mathfrak{n}(\mathfrak{l})$  は可換だから,  $\mathfrak{N}/\mathfrak{B}(\mathfrak{l})$  は  $(2n+1)$  次 Heisenberg 代数  $\mathfrak{h}_n$  に同型になる. ただし  $n = \frac{1}{2} \dim(\mathfrak{n}/\mathfrak{n}(\mathfrak{l}))$ .  $B(\mathfrak{l}) = \exp \mathfrak{B}(\mathfrak{l})$  とおく. すると,  $B(\mathfrak{l}) \setminus N$  は  $(2n+1)$  次 Heisenberg 群に同型になる.  $\mathfrak{l}$  に対応する  $N$  の既約 unitary 表現を  $\pi_{\mathfrak{l}}$  とすると,  $\pi_{\mathfrak{l}} \cong \mathbb{D}_{\mathfrak{l}_0} \circ \rho_{\mathfrak{l}}$  と表される. ただし,  $\rho_{\mathfrak{l}}$  は  $N$  から  $B(\mathfrak{l}) \setminus N$  への自然な射影であり,  $\mathfrak{l}_0 \in (\mathfrak{N}/\mathfrak{B}(\mathfrak{l}))^*$  は  $\mathfrak{l} = \mathfrak{l}_0 \circ \rho_{\mathfrak{l}}$  なる元,  $\mathbb{D}_{\mathfrak{l}_0}$  は  $\mathfrak{l}_0$  に対応する  $B(\mathfrak{l}) \setminus N$  の既約 unitary 表現である.

補題 2.3.  $\mathfrak{l}, \mathfrak{l}' \in \mathfrak{g}^*$  とする. このとき

$$\pi_{\mathfrak{l}} \cong \pi_{\mathfrak{l}'} \iff \begin{cases} (1) & \mathfrak{n}(\mathfrak{l}) = \mathfrak{n}(\mathfrak{l}'), \\ (2) & \mathfrak{l}|_{\mathfrak{n}(\mathfrak{l})} = \mathfrak{l}'|_{\mathfrak{n}(\mathfrak{l})}. \end{cases}$$

証明は. 例えば [M, p1164, Theorem 2.3 (3)]

この補題から, 容易に次が得られる.

補題 2.4  $h \in K$ ,  $\pi = \pi_{\mathfrak{l}}$  とする. このとき,

$$h \in K_{\pi} \iff \begin{cases} (1) & \mathfrak{n}(h\mathfrak{l}) = h \cdot \mathfrak{n}(\mathfrak{l}), \\ (2) & h\mathfrak{l}|_{\mathfrak{n}(h\mathfrak{l})} = \mathfrak{l}|_{\mathfrak{n}(\mathfrak{l})}. \end{cases}$$

ここで, 次で与えられる  $\text{Aut}(N)$  の部分群を考える:

$$\text{Aut}(N)_{\pi} = \{ \varphi \in \text{Aut}(N) \mid (\pi)_{\varphi} \cong \pi \}.$$

ただし,  $(\pi)_h(x) = \pi(\varphi(x)) \quad (x \in N)$ . すると  $K_\pi$  は  $\text{Aut}(N)_\pi$  の部分群とみなせる.  $p_\pi: N \rightarrow B(\ell) \setminus N$  を自然な射影とし, 写像  $\Phi_\pi$  を次で定義する:

$$(2.4) \quad \Phi_\pi: \text{Aut}(N)_\pi \ni \varphi \mapsto \bar{\varphi} \in \text{Aut}(B(\ell) \setminus N).$$

ただし,  $\bar{\varphi}(p_\pi(x)) = p_\pi(\varphi(x)) \quad (x \in N)$ . すると, 補題 2.3. より  $\Phi_\pi$  は well-defined であり,  $\Phi_\pi(K_\pi)$  は  $B(\ell) \setminus N$  の中心を不変にする.

定理 2.5.  $(K; N)$  が Gelfand 対であるということは, すべての  $\ell \in \mathcal{N}$  について,  $\pi = \pi_\ell$  を対応する  $N$  の既約 unitary 表現とするとき,  $(\Phi_\pi(K_\pi); B(\ell) \setminus N)$  が Gelfand 対になるということである.

証明 定理 1.1. により,  $\ell_1, \ell_2, \ell_3 \neq 0$  のときのみ考えればよい.  $\ell \in \mathcal{N}^+$  に対し, ある  $\ell_0 \in (\mathcal{N}/\mathcal{B}(\ell))^+$  が存在して  $\pi_\ell \subseteq \mathcal{D}_{\ell_0} \circ p_\ell$  となる. すると,

$$\pi_\ell(h \cdot x) = \mathcal{D}_{\ell_0}(\Phi_\pi(h)p_\ell(x)), \quad (h \in K_\pi, x \in N)$$

$\mathcal{D}_{\ell_0}$  はある  $R_{\lambda_0}$  に同値とみなせるから,  $\Phi_\pi(K_\pi)$  の intertwining 表現  $W$  が存在して,

$$\mathcal{D}_{\ell_0}(\Phi_\pi(h)p_\ell(x)) = W(\Phi_\pi(h))\mathcal{D}_{\ell_0}(p_\ell(x))W(\Phi_\pi(h))^{-1}.$$

よって,  $W_\pi = W \circ \Phi_\pi$  とすると,  $W_\pi$  は  $\pi_\ell$  と  $(\pi_\ell)_h$  を intertwine



する:

$$\pi_Q(h \cdot x) = W_\pi(h) \pi_Q(x) W_\pi(h)^{-1}.$$

よって,

$$c(T, W_\pi) \leq 1 \quad \forall T \in K_\pi \iff c(T', W) \leq 1 \quad \forall T' \in \mathfrak{A}_\pi(K_\pi).$$

このことと, 定理 1.1. 及び 命題 2.1. を組み合わせることにより主張を得る. (証明終)

### § 3 反例

ここで 定理 2.5. の応用例を与える.  $N$  を 2-step 中零 Lie 群,  $\mathfrak{n}$  をその Lie 代数とする.  $\mathfrak{z}(\mathfrak{n})$  を  $\mathfrak{n}$  の中心,  $[\mathfrak{n}, \mathfrak{n}]$  を  $\mathfrak{n}$  の導来 ideal を表す.  $\mathfrak{n}$  が 2-step なので,  $[\mathfrak{n}, \mathfrak{n}] \subset \mathfrak{z}(\mathfrak{n})$ . 今,  $[\mathfrak{n}, \mathfrak{n}] \neq \mathfrak{z}(\mathfrak{n})$  なる場合を考える.  $K$  を  $\mathfrak{n}$  に自己同型として作用する compact 群とする. すると  $\mathfrak{n}$  上に  $K$  不変な実内積  $\langle \cdot, \cdot \rangle$  が存在する. この内積について  $\mathfrak{n}$  と  $\mathfrak{z}(\mathfrak{n})$  を分解する:

$$(3.1) \quad \mathfrak{n} = \mathfrak{n}' \oplus \sigma \oplus [\mathfrak{n}, \mathfrak{n}],$$

$$(3.2) \quad \mathfrak{z}(\mathfrak{n}) = \sigma \oplus [\mathfrak{n}, \mathfrak{n}].$$

$\mathfrak{n}_1 = \mathfrak{n}' \oplus [\mathfrak{n}, \mathfrak{n}]$  とおく. すると,  $\mathfrak{n}_1$  は  $\mathfrak{n}$  の部分代数になり,  $\mathfrak{z}(\mathfrak{n}_1) = [\mathfrak{n}_1, \mathfrak{n}_1] = [\mathfrak{n}, \mathfrak{n}]$ . さらに,  $\sigma, \mathfrak{n}_1$  は  $\mathfrak{n}$  の ideal であり,

$$(3.3) \quad \mathfrak{n} = \mathfrak{n}_1 \oplus \sigma.$$

$N_1, A$  をそれぞれ  $\mathfrak{n}_1, \sigma$  に対応する  $N$  の部分群とする.

命題 3.1.  $(K; N)$  が Gelfand 対ならば,  $(K; N_1)$  も Gelfand 対である.

この命題の逆を考える.  $[L]$  や  $[BJR]$  においては,  $L_K^1(N)$  と  $L_K^1(N_1)$  の可換性は同値と記述されている. しかし,  $L_K^1(N_1)$  の可換性から  $L_K^1(N)$  の可換性は得られない. このことについての反例を以下で述べる.

$N$  を  $\mathbb{C} \times \mathbb{C} \times \mathbb{R}$  に同相な中零 Lie 群,  $\mathcal{N}$  をその Lie 代数とし, その括弧積は次下与えられるものとする:

$$[(z_1, z_2, t), (z_1', z_2', t')] = (0, 0, -\operatorname{Im} z_1 \bar{z}_2').$$

$K = T$  とし,  $K$  は  $\mathcal{N}$  に次のように作用する:

$$e^{F\theta} (z_1, z_2, t) = (e^{F\theta} z_1, e^{F\theta} z_2, t).$$

この節の初めの記号を用いると以下のようになる:

$$\mathcal{N}(\mathcal{N}) = \mathbb{C} \times 0 \times \mathbb{R}, \quad [\mathcal{N}, \mathcal{N}] = 0 \times 0 \times \mathbb{R},$$

$$\mathcal{N}_1 = 0 \times \mathbb{C} \times \mathbb{R}, \quad \mathcal{N} = \mathbb{C} \times 0 \times 0.$$

容易に分かるように,  $\mathcal{N}$  は 3 次 Heisenberg 代数と同型になる.  $N_1$  は  $\mathcal{N}_1$  に対応する  $N$  の部分群とする.

定理 3.2.  $(K; N_1)$  は Gelfand 対である. しかし  $(K; N)$  は Gelfand 対ではない.

証明  $N_2$  は 3 次 Heisenberg 群に同型で,  $K = \mathbb{T}$  だから  $(K; N_2)$  は Gelfand 対になる ([BJR]).  $(K; N)$  が Gelfand 対でないことを示そう.  $\mathcal{N}$  の基底として以下のものをとる:

$$E_1^R = (1, 0, 0), \quad E_1^I = (\sqrt{-1}, 0, 0),$$

$$E_2^R = (0, 1, 0), \quad E_2^I = (0, \sqrt{-1}, 0),$$

$$T = (0, 0, 1).$$

$\lambda \in \mathcal{N}$  を  $\lambda(z_1, z_2, t) = \operatorname{Re} z_1 + t$  とする. すると,  $\mathcal{N}(\lambda) = \mathbb{Z}(\mathcal{N})$ ,  $\mathcal{B}(\lambda) = \mathbb{R}E_1^I + \mathbb{R}(T - E_1^R)$  となり,  $\mathcal{N}/\mathcal{B}(\lambda)$  は 3 次 Heisenberg 代数に同型になる.  $e^{\sqrt{-1}\theta} \in K$  について,

$$\lambda(e^{\sqrt{-1}\theta}(z_1, 0, t)) = x_1 \cos \theta - y_1 \sin \theta + t.$$

ただし,  $z_1 = x_1 + \sqrt{-1}y_1$  ( $x_1, y_1 \in \mathbb{R}$ ).  $\pi$  を  $\lambda$  に対応する既約 unitary 表現とすると,  $K_\pi = \{1\}$ . よって,  $\overline{\mathbb{Z}}_\pi(K_\pi) = \{1\}$ . 然るに,  $(\overline{\mathbb{Z}}_\pi(K_\pi); \mathcal{B}(\lambda) \setminus \mathcal{N})$  は Gelfand 対ではない. 定理 2.5 より,  $(K; N)$  は Gelfand 対ではない. (証明終)

(3.3) より,  $N = N_2 \times A$  である. 故に  $L^1(N) = L^1(N_2) \otimes L^1(A)$  となる. しかし, 定理 3.2 より,  $L_k^1(N)$  は  $L^1(A)$  のいかなる部分代数  $B$  に対して,  $L_k^1(N_2) \otimes B$  とは表されない.

#### § 4 Leptin's Problem

$N$  を 2-step 中零 Lie 群とし,  $K = \mathbb{T}^n$  が  $N$  に自己同型として

作用しているとする. Leptinが  $[L]$  において提示した次の問題を考えてみよう.

問題 4.1.  $(K; N)$  が Gelfand 対となるのはどのようなときか?

例えば,  $(\mathbb{T}^n, H_n)$  は Gelfand 対である ([HR]).  $[n, n] = \mathbb{Z}(n)$ , かつ  $\mathbb{T}^n$  が効果的に作用しているとき, Leptin は  $[L]$  において以下のような解答を与えた:

$(\mathbb{T}^n; N)$  が Gelfand 対になるのは,  $N$  が  $(H_2)^n$  の中心部分群による商群で,  $\mathbb{T}^n$  が  $(H_2)^n$  に自然に作用しているときである. このとき,  $\mathbb{T}^n$  は  $\mathbb{Z}(N)$  に自明に作用する.

そこで,  $[n, n] \neq \mathbb{Z}(n)$  の場合について考察し, 問題 4.1 の完全な解答を与える. (3.2), (3.2), (3.3) の分解を再び用いる.  $\hat{K}^r$  を既約実  $K$  加群の同値類全体のなす族とする. すると,  $\hat{K}^r$  は  $\mathbb{Z}^n$  と同一視される. ただし  $\alpha \sim \beta \Leftrightarrow \beta = \pm \alpha$  ( $\alpha, \beta \in \mathbb{Z}^n$ ). 代表系を固定することにより  $\hat{K}^r$  を  $\mathbb{Z}^n$  の部分集合とみなす.  $\pi$ ,  $\sigma$  をさらに isotypic な実加群の直和に分解する:

$$(4.1) \quad \pi = \sum_{\alpha} V_{\alpha}^{\pi}, \quad \sigma = \sum_{\alpha} V_{\alpha}^{\sigma}.$$

0でない  $\alpha \in \mathbb{Z}^r$  に対し,  $V_\alpha$  を次の性質をもつ 2 次実  $K$  加群  $\mathbb{R}X_\alpha + \mathbb{R}Y_\alpha$  とする:

$$(4.2) \quad (\exp U \cdot X_\alpha, \exp U \cdot Y_\alpha) = (X_\alpha, Y_\alpha) \begin{pmatrix} \cos \alpha(U) & -\sin \alpha(U) \\ \sin \alpha(U) & \cos \alpha(U) \end{pmatrix}.$$

ただし  $U \in \mathbb{R}$ ,  $\mathfrak{R}$  は  $K$  の Lie 代数とする.  $\alpha = 0$  のときは  $V_\alpha$  は 1 次自明実  $K$  加群とする.  $V'_\alpha, V''_\alpha$  はそれぞれ  $V_\alpha$  の重複度  $m_{\alpha,1}, m_{\alpha,2}$  の直和と考える.

$$(4.3) \quad V'_\alpha = m_{\alpha,1} V_\alpha = \sum_{i=1}^{m_{\alpha,1}} V_{\alpha,i}', \quad V''_\alpha = m_{\alpha,2} V_\alpha = \sum_{i=1}^{m_{\alpha,2}} V_{\alpha,i}''.$$

$\mathbb{R}^r$  の部分集合  $S_1, S_2$  をそれぞれ以下のものとする:

$$(4.4) \quad S_1 = \{\alpha \in \mathbb{R}^r \mid m_{\alpha,1} \neq 0\}, \quad S_2 = \{\alpha \in \mathbb{R}^r \mid m_{\alpha,2} \neq 0\}$$

定理 4.2.  $(K; N)$  が Gelfand 対であるのは, 以下の 5 つの条件を満たすときである:

- (1)  $m_{0,1} = 0$ .
- (2)  $S_1$  は 1 次独立な集合.
- (3)  $m_{\alpha,1} = 1, \forall \alpha \in S_2$ .
- (4)  $\mathbb{R}\text{-Sp}(S_1) \cap \mathbb{R}\text{-Sp}(S_2) = 0$ .
- (5)  $K$  は  $[n, n]$  に自明に作用する.

この定理を証明するために, 次の補題を用意する.

補題 4.3.  $K$  を  $n$  次 Compact 可換 Lie 群 (必ずしも連結ではない) とし,  $K$  は  $H_n$  に自己同型として効果的に作用しているとする. このとき,  $(K; H_n)$  が Gelfand 対となるのは  $n=m$  のときである.

このことは, [BJR], Theorem 5.17 の証明より分かる.

定理 4.2 の証明の概略 第 1 段:  $V_1, V_2$  を互いに直交する  $\mathcal{N}$  の  $K$  不変部分空間とする. このとき  $[V_1, V_2] = 0$  ([BJR, p107] Leptin の定理の証明を参照). 特に  $[V'_0, V'_0] = 0$  ( $\alpha \in S_1$ ) となることが分かり,  $[V'_0, \mathcal{N}] = 0$ . よって  $m_{\alpha 1} = 0$ . これにより (1) が示された. また, 任意の  $0 \neq \alpha \in \hat{K}^r$  について,

$$[\exp tV, X_\alpha, \exp tV, Y_\alpha] = [X_\alpha, Y_\alpha], \quad (t \in \mathbb{R}).$$

このことと,  $[V'_{\alpha, i}, V'_{\alpha, j}] = 0$  ( $i \neq j$ ) より,  $K$  は  $[\mathcal{N}, \mathcal{N}]$  に自明に作用していることが分かる. よって (5) が示された.

第 2 段: (2) ~ (4) を示す.  $\mathfrak{l} \in \mathcal{N}$  を  $\mathfrak{l}([V'_{\alpha, i}, V'_{\alpha, i}]) \neq 0$  ( $\alpha \in S_1, 1 \leq i \leq m_{\alpha 1}$ ), かつ  $\mathfrak{l}(X_{\beta, i}) = 1, \mathfrak{l}(Y_{\beta, i}) = 0, \mathfrak{l}|_{\mathcal{N}} = 0$  なるものとする. このとき,  $\mathfrak{n}(\mathfrak{l}) = \mathfrak{Z}(\mathcal{N})$  であり,  $\mathfrak{n}/\mathfrak{B}(\mathfrak{l}) \cong \mathfrak{g}_m$ . ただし,  $m = \sum_{\alpha \in S_1} m_{\alpha, 1}$ .  $\pi = \pi_{\mathfrak{l}}$  を  $\mathfrak{l}$  に対応する  $N$  の既約 unitary 表現とすると,

$$K_{\mathfrak{l}} = \{k \in K \mid k \cdot X = X \quad \forall X \in \mathfrak{Z}(\mathcal{N})\}.$$

これを  $K_{\mathfrak{l}}$  の Lie 代数とする. すると,

$$\begin{aligned} \mathbb{R}_\pi &= \{U \in \mathbb{R} \mid U \cdot X = 0 \quad \forall X \in \mathfrak{Z}(\mathfrak{n})\} \\ &= \bigcap_{\beta \in S_2} \ker \beta. \end{aligned}$$

このとき,  $\mathbb{R}_\pi$  の元は  $\text{Aut}(\mathfrak{N}/\mathfrak{G}(\mathfrak{L}))$  に誘導される. この対応を (2.4) と同様に取ると, その微分  $d\Phi_\pi$  は,  $\mathbb{R}_\pi$  から導分代数  $\text{Der}(\mathfrak{N}/\mathfrak{G}(\mathfrak{L}))$  への写像になる. このとき,

$$\begin{aligned} \ker d\Phi_\pi &= \{U \in \mathbb{R}_\pi \mid \alpha(U) = 0 \quad \forall \alpha \in S_1\} \\ &= \left( \bigcap_{\alpha \in S_1} \ker \alpha \right) \cap \left( \bigcap_{\beta \in S_2} \ker \beta \right). \end{aligned}$$

定理 4.3 より,

$$\begin{aligned} m &= \dim d\Phi_\pi(\mathbb{R}_\pi) \\ &= \dim \left( \bigcap_{\beta \in S_2} \ker \beta \right) - \dim \left( \left( \bigcap_{\alpha \in S_1} \ker \alpha \right) \cap \left( \bigcap_{\beta \in S_2} \ker \beta \right) \right) \\ &\leq n - \dim \left( \bigcap_{\alpha \in S_1} \ker \alpha \right) \\ &\leq \# S_1 \leq \sum_{\alpha \in S_1} m_{\alpha,1} = m. \end{aligned}$$

これらの不等号はすべて等号になる. よって (2) ~ (4) は示された.

第3段: 逆に (1) ~ (5) が満たされているとする. このとき  $(K; N)$  が Gelfand 対であることを示す. そのためには, 定理 2.5. における  $\mathfrak{l}$  として, 最大次元の余随伴軌道に属するもののみを考えればよい. まず, (1) ~ (3) より,

$$[V'_\alpha, V_\beta] = 0, \quad (\alpha, \beta \in S_1, \alpha \neq \beta).$$

が得られる. このことにより,  $\mathfrak{l}$  を通る余随伴軌道が最大次元となるのは,  $\mathfrak{l}([V'_\alpha, V_\beta]) \neq 0$  ( $\alpha \in S_1$ ) となるときである.

よって,  $\mathfrak{l}([V'_\alpha, V_\beta]) \neq 0$ ,  $\mathfrak{l}1_\pi = 0$ . したがって  $\mathfrak{l}1_{V'_\alpha} \neq 0$  ( $\alpha \in S_1$ ),

$1 \leq j \leq m_{B2}$ ) としてよい. このとき,  $\mathcal{N}(l) = \mathcal{Z}(N)$  であり,  
 $\mathcal{N}/\mathcal{O}(l) \cong \mathfrak{g}_m$ , ただし  $m = \#S_2$ .  $\pi = \pi_l$  を  $l$  に対応する既約  
 unitary 表現とすると, (5)より,

$$K_\pi = \{h \in K \mid h \cdot h = l \text{ on } \mathcal{Z}(N)\}$$

$$R_\pi = \{U \in R \mid U \chi = 0 \quad \forall \chi \in \mathcal{O}(l)\} = \bigcap_{\beta \in S_2} \ker \beta$$

第2段と同様に写像  $\Phi_\pi: K_\pi \rightarrow \text{Aut}(\mathcal{N}/\mathcal{O}(l))$  を考えると,  $\Phi_\pi$  の微分  $d\Phi_\pi$  について,

$$\ker d\Phi_\pi = \left( \bigcap_{\alpha \in S_1} \ker \alpha \right) \cap \left( \bigcap_{\beta \in S_2} \ker \beta \right).$$

よって, (1)~(4)より,

$$\begin{aligned} \dim d\Phi_\pi &= \dim \left( \bigcap_{\beta \in S_2} \ker \beta \right) - \dim \left( \left( \bigcap_{\alpha \in S_1} \ker \alpha \right) \cap \left( \bigcap_{\beta \in S_2} \ker \beta \right) \right) \\ &= \dim R - \dim \left( \bigcap_{\alpha \in S_1} \ker \alpha \right) \\ &= \#S_1 = m \end{aligned}$$

補題 4.3. より,  $(\Phi_\pi(K_\pi); B(l) \setminus N)$  は Gelfand 対. 定理 2.5 より,  
 $(K; N)$  は Gelfand 対であることが分かる. (証明終)

### Reference

- [BJR] C. Benson, J. Jenkins, and G. Ratcliff: On Gelfand pairs associated with solvable Lie groups; Trans. Amer. Math. Soc. 321 (1990), 85-116.  
 [Br] I. D. Brown: Dual topology of a nilpotent Lie group;



- Ann. Sci. École Norm. Sup. 6 (1973), 409-411.
- [C] G. Carcano: A commutativity condition for algebras of invariant functions; Boll. Un. Mat. Italiano 7 (1987), 1091-1105.
- [HR] A. Hulanicki, and F. Ricci: A tauberian theorem and tangential convergence of bounded harmonic functions on balls in  $\mathbb{C}^n$ ; Invent. Math. 62 (1980), 325-331.
- [ki] A. Kirillov; Unitary representations of nilpotent Lie groups; Russ. Math. Survey 17 (1962), 53-104.
- [L] H. Leptin: A new kind of eigenfunction expansion on groups; Pacific J. Math. 116 (1985), 45-67.
- [M] K.G. Miller; Parametrices for hypoelliptic operators on step two nilpotent Lie groups; Comm. in Partial Differential Equations, 5 (11), (1980) 1153-1184.